

一色えびせん売り込め

愛教大生 授業でPR案発表

愛知教育大(刈谷市)の学生が十七日、コンサルタント業務を通して課題を解決する力を養う授業の一環で、西尾市名産の「三河一色えびせんべい」のPR方法を発表した。

せんべいは、エビを主原料にジャガイモのでんぷんや塩などを加えた保存の利くお菓子で、同市一色地区では九十年以上の歴史がある。三河一色えびせんべい工業組合には現在、西尾市内の三十六

三河一色えびせんべいの販促方法を提案する学生が愛知教育大で



社が加盟している。二年生三十二人が一年かけ、えびせんべいの特長や問題点などを

研究。この日は八チームに分かれ、十四分間ずつ、消費拡大のために考えた企画を披露した。

語呂合わせも踏まえ「一色産の意識が足りないのでは」との仮説を立てたチームは「パッケージを単色(一色)にして、産地を印象づけては」と提案。ほかにも各店の一押し

商品で競う「EB(えび)ーグランプリ」や、エビの「めでたいい」イメージを生かした神社での販売、若い女性をターゲットにした「えびせんカフェ」などさまざまな案が飛び出した。

発表を聞いた同工業組合の鈴木茂樹組合長(五巴)は「学生としては現実的な考えが多く、すぐに使えそうな発想だった」と感心。指導する美術教育講座の富山祥瑞教授は「課題解決に向けて筋道をつけて考える作業。教員となつてからの指導にも役立ててほしい」と話した。

(土屋晴康)